

2008 年 海外派遣しポート

期間 2008 年 2 月 5 日 (火) ～ 2 月 11 日 (月)
研修先 カナダ (ビクトリア、バンクーバー)
報告者 河野秀親

福祉先進国カナダ (ビクトリア) を訪ねて
～ビクトリア市の高齢者福祉施設の現状とカナダの街並～



Cridge Village Seniors Centre



■研修目的

今回の派遣事業はこれまでの研修と異なり、最初から福祉先進国の現状を視察することにあつた。派遣メンバー（4名）はそれぞれの立場で、ある程度専門的に絞込んだテーマで視察するという研修となった。当初、派遣メンバー4名と引率者として国際交流員のカールの5名で各施設の見学をするスケジュールであつた。

しかし、出発前日になりカールが熱を出し、引率できなくなったのである。想定外の出来事で4名のメンバーだけで出発することになった。楽しみと希望に満ちた研修は一挙に先行き不安な研修旅行となった訳である。

■不安の始まり

突然、カールが行けなくなったことで最も不安を抱いたのは、施設案内の通訳の不在である。通常の観光旅行であればそれほど致命的なことではなかったが、今回は福祉の専門的な説明が理解できなければ意味のない研修になってしまうのです。

早速、出発するときに現地での通訳のできる人を事務局にお願いし出発することになった。ビクトリアに到着するまでには是非、通訳を見つけて戴く事を願いつつ、カナダに向かったのである。連絡には時差が障害になり更なる不安もあつた。しかし、今回は当初から国際電話とメールの出来る携帯を皆、持参していたために、時差（7時間）：（カナダの12時＝日本の朝5時）を乗り越えて串間（事務局）との連絡がとれた。文明の力を有難く感じた旅であつた。

現実にはバンクーバーに到着してもまだ見つからず一層不安は募つた。事務局の朗報を待ちながらフェリーの旅を楽しむ事にした。そして、ビクトリアに到着寸前の夕方に現地の通訳が見つかったとメールがあり、ここでようやく不安が少し解消され皆ホッとしたところでした。

■ビクトリア

バンクーバーアイランドは海に囲まれた島で、カナダの中でも最も温暖な気候で大変住み易いところである。ビクトリアは北海道より北に位置する場所にかかわらず、冬においても気温が一定しており0° から10° 程度で、思っている程寒くはない。さらにびっくりするのは冬でも雪がほとんど降ることがないのである。この島は九州を少々小さくしたくらいの広さである。その島に約60万人が住んでいる。その中でビクトリア市には人口の半分にあたる約30万人が住んでいる。

広さは南北に車で30～40分、東西は15～20分程度の縦長の串間とほぼ同じくらいの広さである。ガーデンシティと言われるように、街中には緑がいっぱいでカナダでもっとも美しい街と言われている。

カナダの住民はこのビクトリアに永住の地を求めて引越してくるのです。特に南部のオークベイ地区は高級住宅地として大変人気がある。

中心市街地は整然とした街並で全ての通りに名称が付けられ、主な交差点には街案内のオシャレな案内図が設けられている。自分の立っている位置がわかるので初めての街歩きも迷うことはない。また、シャッターのないショーウィンドは閉店後もウインドショッピングを楽しむことができるので有難い。又、レストラン内部の照明はほとんどキャンドルの明かりで大人のムードである。日本人には少し暗いので馴染めないかも知れないが、時間と共にムードある暗さの世界を堪能できた。



■高齢者福祉施設の現状



(1) Abbeyfield House

最初に訪問したのが 12 名が入居している Abbeyfield House という小規模のグループハウスであった。日本で言うグループホームという認知証の人が入る施設に似ている。しかし、このグループハウスは健康で一人暮らしをしている高齢者が入って生活する住まいである。(施設ではなく住まい＝リビングと呼ぶ)

内部空間も家庭的で快適に過ごせる雰囲気である。食堂はまるでホテルのレストランのよう、壁には絵画が飾られギャラリーを思わせる。もっと驚かされたのは施設の管理をボランティアの夫婦が運営しているのである。

買い物や掃除、パソコンの訓練等は外部からのボランティアで賄われているという。また、カナダでは親子は別々に生活することが普通であり、一緒に生活する習慣はあまりないとのこと。

これらも日本とは大きく異なるなあと感じた。因に一人の入居費は約 10 万円／月程度で収入によって入居費は異なるようだ。



(2) Douglas Care Community

この施設は入居者が 28 名。一般の高齢者や認知証の人などが同居している。隣には 7 名が入居しているアシストリビングがある。通常は自分で生活しているが昼食や夕食などは Douglas Care を利用する。また定期的に健康診断や交流等行う。道路向かいには高齢者用のアパートがあり将来において介護が必要になった時点で利用する人たちの施設である。つまり、コミュニティという概念の基に施設全体を運営するようなシステムである。ここで、老人を定期的に公民館の温水プールに連れていくという説明があった。皆、ここで、聞き慣れない公民館の在り方に興味を抱く。学校にはプールがなく、各地区の公民館に設けられているとのこと。後日、その実態を見学することとなった。

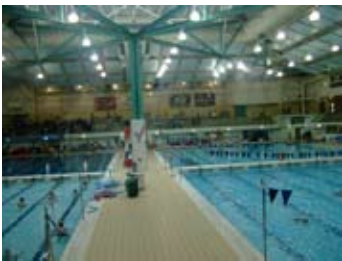


(3) Sanrise Senior Living

この施設は高級有料老人ホームといえる。100 名が入居し、家庭のように生活することができる。レストランはオシャレな高級レストランというイメージである。又、家族の人やボランティアの人が利用できるゲストダイニングルームも設けてある。更に図書室やミニ映画館、ゲーム室、美容室、暖炉など様々な娯楽設備が整っている。

周辺の環境は緑地、海、公園などがあり、まるで公園の中にある施設のようであった。





(4) The Cridge Village Seniors Centre

旧孤児院をリフォームと増築を行い老人ホームにした施設である。また、隣に保育園を新たに新設し、高齢者と子供たちが交流を定期的におこなうことでお互いに良い影響を与えている。このような子供と老人との施設を一体化して運営している施設はまだ少ないが今後、急速に増えていくことが予想される。またこの施設の周辺には入居者の子供や孫たちが生活できるようなアパートも用意されている。このことで家族といつでも会えるので大きな支えになっている。今後、ドメスティックバイオレンス（家庭内暴力）の被害者を一次的に受け入れるアパートの整備もしたいとのことであった。

今回の研修では是非、保育園を見たいという希望があった。しかし、ここでも最初は見せて頂けなかった。しかし、最後のまで通訳を通じて直接交渉したところ、保育園を見せて頂けることになった。最後に今回の目的の一つが叶った瞬間であった。恐らく単なる施設見学であったなら無理だったかなと思った。最後まであきらめず熱意を伝える大切さを痛感した次第である。

(5) Aberdeen Hospital

交通事故で障害のある若者病棟、一般の病棟と高齢者の病棟がある。ここでは長期療養になるので住まいという概念の病院となっている。様々な障害者に対してそれぞれのケアができるよう充実した設備や器具が備え付けてある。また、各部屋の天井には走行リフト（100室）が取付けられ介護の負担軽減に努められている。

更に、隣にはシニアセンターがあり予防介護や家族の滞在用のホテルに使われている。ここでもコミュニティの概念があると感じられた。

(6) Saanich Commonwealth Place

この施設は日本でいう各地区の公民館である。最初に驚かされたのがビクトリアの学校にはプールがないとのこと。なぜ？という疑問が脳裏を横切った。その替わり、各地区の公民館に温水プールをつくり子供から学校、一般、高齢者まで全ての人が利用できるようにしているのだと。一瞬、本当かなと思った。

しかし、それどころか、今回見学した施設は25m、50m、飛び込み、多目的な遊びプールなどが設置され、さらに、カルチャールーム、スポーツトレーニング、キッズルーム、レストランなど全ての多種多様の施設が整っているのである。さらに、平日は朝5時半から夜10時半まで利用できるからびっくりであった。このように充実した施設をつくれば各学校に短期間しか使わないプールを造る必要はないと思った。



■ これからの老人福祉

今回の視察をして思うことは、これまでの無機質で味気ない施設のイメージを脱却し家庭的で暖かなリビングを目指す必要性を痛感した。どの施設に行っても施設の管理者が言われることはリビングとかコミュニティの言葉であった。

日本はまだまだ4人部屋や2人部屋であり、また、部屋の大きさにおいても全く狭く窮屈である。これも、日本の施設基準の低さに原因があるものと思う。もう少し家庭的な生活ができるスペースの確保と暖かな温もりのある空間づくりが必要ではなかろうか。

これから日本はさらに高齢化が進み、施設利用者が急速に増えるものと考えられる。もちろん医療費も増え、介護を必要とする人も増え、一人暮らしが増えることも避けられない。カナダも同様である。これらの医療費、介護費を抑えなければならない政策として、今、カナダでは予防介護に最も力を注がれている。その対策として、いかに元気で暮らせるか。いかに病院に係らないで生活できるかなどであろう。そのためには健康な身体づくりや食生活の指導、ボランティアの育成、地域との交流ネットワークづくり、子供と老人との相互交流など様々な取り組みが必要となると思われる。その一つに公民館活動を中心とした交流ネットワークづくりも大きな役割を持つ。

更に、小さな単位の居住空間（10名前後グループリビング）の創出や高齢者のケアアパート、医療機関との連携を深めるなどがあるように痛感した。

■ U, I, J ターン受入のまち

団塊の世代がいよいよ定年を迎える時代に入った。しかし、まだまだ現役で働き盛りの年代でもあるのです。これまで地方から都会へ働きにでていた人たちが、定年後は自然豊かなふるさとで第二の人生を過ごしてみたいと考えている。しかし、受入住宅の不足や新たな土地探し、働く場、地域との関わりなど様々な問題が山積み簡単には実現していない。

さらに都会の人が新天地を求めてのんびりと過ごしたいなどの人も多く、これらの人にとっての受け皿が少ないのも事実である。

串間は自然豊かで土地もあり、また空家なども多く存在する。これらの埋もれた宝物を掘り起こし、古くてもちょっとオシャレな住まいを提供することで多くの移住受け入れができるのではなかろうか。人口の減少が進む中、唯一の人口増加対策になると期待できる。また、リタイヤした中にはこれまで培った様々な専門知識をもった人が多いと思われる。これらの人々が地域活性化の原動力になるものと期待される。



■バンクーバー中心市街地

ブリテッシュコロンビア州バンクーバーは人口約 60 万人。周辺の 10 余の自治体を合わせてグレーター・バンクーバーという都市圏を形成している。この都市圏には人口約 150 万人が住んでいる。

海に囲まれたバンクーバー市はウォーターフロント計画が進み整然とした都市計画が整備され通り名が付けられた。しかし、1886 年に大火があり街の大半が消滅した。このとき復興に努力した人々の名前や木の名前、他州の名前が通り名称に付けられた。そして景観を重した政策で現在は超高層ビルや緑も多いオシャレな街となっている。

バンクーバーのメインストリートであるダウンタウンのロブソン通りは整然としたオシャレなショッピング街が連続し、多くの買い物客で年中にぎわいを見せている。

ここで特に気になったのが店舗前に設けられてオシャレな庇である。日本では共同の統一されたアーケードを多く見かける。しかし、バンクーバーでは個々の店で個性的な庇を歩道の上に設けオシャレな街並を形成している。看板も規制され美しい街並を形成している一つの要因となっている。

また、ゴミがなく美しい街並になっていることに気づかされる。ゴミは一体どこにあるのだろうか？いつ回収しているのか？疑問点があった。

街中に隠れたように 100 ～ 200 メートル程度毎にサービス道路があるのです。そこに、電柱が集中的に設置され、大きなゴミ箱が置かれているのです。色彩的にも暗くなっているので通常、メインストリートを歩いても見落としてしまう。

ゴミの回収は朝の暗い時間（午前 6 時～7 時頃）にゴミ収集車がきて収集していることを目撃した。つまり、朝の出勤前の時間に収集され市民が行動する時間帯にはきれいに掃除され、美しい街並になっているのです。さすがうまく考えているなーと思った。

また、各通りには全て名称がつけられている。交差点には必ずその通り名が下げられどちらからも見えるようになっている。つまり、どこを歩いても自分の居場所が分かりその場所を伝える事ができるのです。そして、店の案内も簡単にできるのです。実に分かり易いまちづくりである。

我が街、串間と見比べると全く通り名がないことに気づく。訪問者にとっては全く分かりにくい街である。串間市は観光都市でもある。訪問者に優しいまちづくりのために、是非、通り名称、地区名などを表示し、人に優しいまちづくりを進める必要があるのではと思う。もちろん、地元の人も優しく道案内ができるのです。携帯電話で自分の居場所が分かる優しいまちにしたいなあ切に願うところです。



■グランビルアイランド (Granville Island)

ダウンタウンから南へ進むとグランビルブリッジの下にある小さな半島の一帯がグランビルアイランドである。かつては、製材所や中小工場の密集地帯であった。1973 年からかつての工場の建物を出来る限り残し、新たに大規模な再開発が行われた。

単なる観光スポットではなく、まずは市民が楽しめるまちづくりが重視された。工場はレストラン、マーケット、小劇場、アートギャラリー、美術大学へと変身した。さらにマリナー、マリンスポーツ店、ショッピングモール、地ビール工場、ホテルなど様々な施設が整備されオシャレな街に変貌した。

中でも、中心的な役割を担っているパブリックマーケットでは新鮮な野菜、果物がバラ売り、量り売りでゴミを出さない、持ち帰らない環境に優しい販売が行われている。また、週末には多くの観光客や市民が訪れてにぎわいを見せている観光スポットとなっている。

建物の色彩、サイン、外灯、駐車場などの景観にも配慮がされ、実に歩いて楽しい居心地の良いアイランドであった。

■ノースショア

ガスタウンのウォーターフロント駅からシーバスで約 15 分でノースショアのロンズデルキーに到着する。そこには生鮮野菜や果物、魚、総菜、ファッション、雑貨など多種多様なショッピングが楽しめる庶民的なロンズデルキーマーケットがある。ここからはバンクーバーの美しい高層ビル群が眺望できるデッキの広場がある。週末の広場には多くの市民が集まりにぎわいを見せる観光スポットとなっている。

■キャピラノ渓谷

世界で最も美しい都市の一つに数えられるノースバンクーバー。ノースバンクーバーとウエストバンクーバーの間に挟まれた位置にキャピラノ渓谷がある。有名なキャピラノ吊り橋 (Capilano Suspension Bridge) はこの渓谷に架かっている。全長 137m、水面からの高さ 70m は圧巻である。対岸にはカナダ杉の巨木林がありその間を散策できる。森林浴を満喫でき気持ち良い空間である。

■人との出会い

(1) シーコードさん（通訳）との出会い

今回の研修で最も感謝したい一人は通訳のシーコードさんであった。全く知らない国で初めて出会い、2日間の施設の案内や通訳を分かり易く丁寧にして説明して戴いた。予定にもないスケジュールにも関わらず公民館やビクトリア大学、街案内までして戴いた。

私たちも最後にお礼にと夕食を誘ったところ、逆に自宅に来ませんかと誘われ、夕食に招待されることになった。全く予想しない嬉しい訪問となりカナダの家庭のありのままを知る事ができ、貴重な体験ができた。カールが行けなかったことからこのようなハプニングがあり、素晴らしい巡り会いができたものと思います。カールが行けなかったことは大変残念でならないが、私たちに大きな試練を与えてくれたことで、二度と味わうことのできない体験ができたことには大変感謝したい。



(2) リチャードさん宅へ訪問

一樹くんが以前お世話になったリチャード夫妻との連絡がとれ電話して下さいとの一報が入った。早速連絡を行いバンクーバーで合う約束がとれた。

研修が終わり次の日ビクトリアからバンクーバーに向かい昼頃ホテルに到着した。その足で早速シーバスに乗りノースショアに向かった。リチャードさんの奥さん（良子さん）は大変忙しい中、時間を作って頂きキャピラノ溪谷や自宅まで案内して戴いた。わずかな滞在時間ではあったがリチャードさん宅を拝見し、また、雪の積もった風景を楽しむことができた。

人と人との縁がこのような形で繋がり、更なる交流が生まれたことは大変素晴らしいことだなあと感じました。今後、更なる交流が深まる事を期待したい。





■総評

今回のカナダ研修は最初から想定外の出来ごとが発生した旅であった。通常の観光ツアーとは異なり大変勉強になることは十分承知の上での参加ではあったが、やはり出発当日の朝になりカールが行けなくなったことは皆ショックであった。しかし、その当日であったから腹が座ったのかも知れない。

通訳の不安が一番であったが、その他にもバンクーバー空港からビクトリアまで行くのにバス乗り場、乗車券の購入、そしてビクトリアについてからホテルまでの道のりなど不安はつきなかった。

それから、当日の施設見学の交通手段は？誰が案内するの？実際のところその不安が的中した。市役所で車を手配して頂けるのかなと思っていたが、全くその様子はなかった。朝、ホテルまで挨拶と食事は同席して戴いたが、そこから先は何も段取りがされていなかった。たまたま通訳のシーコードさんが車で来られていたので同乗させて戴くことになりホッとしたところであった。

その後、レストランでの食事、タクシーやシーバスの乗り方、買い物など全てを4名で協力しながら行動して乗り切る事ができた。また、私事ではあるが2日目に一眼レフのカメラを床に落とし破損してしまう。しかし、予備のレンズを持参していたので何とか記録を残すことができた。バンクーバー空港では荷物の重量オーバーの為に中身を入替え手持ちで税関に入ったところ、液体の規制に引っかかり30分足止め。他の3名はそのことに気づかず搭乗口へ。後でそのハプニングにびっくりする始末。御陰で様々な貴重な体験をさせて頂き、皆、外国旅行についてかなり自信に繋がったものと思う。

今回は急きょ私が臨時の添乗員的な役割を引き受けることとなり、かなりのプレッシャーの中で7日間の研修の旅をすることとなった。これも、10年前にバンクーバー、ビクトリアに研修に訪れていた経験があったから何とか乗り切ったものと思う。この経験は二度と味わう事のできない貴重な体験となりました。そして、何より無事に帰国できた事に大変安堵したところです。

今後の研修の企画にはこのような想定外のことも視野に入れた方がよいのではとつくづく思いました。特に通訳は現地の人をお願いするといった配慮が必要かと思いました。

最後にカールには大変残念であったのと気の毒だったと思います。本来であれば実の妹とバンクーバーで再会を楽しみにしていたのに！しかし、御陰さまで大変貴重な出会いと体験をさせて頂きありがとうございました！メンバー全員が今回の体験に感謝しています。

国際交流協会の竹下理事長、川崎事務長には大変な心配とご苦勞を掛けました。恐らくこれほどに心配した研修旅行は初めてではなかったかと思います。

本当にありがとうございました！！